を入手した程嘉祥がそれで一六四〇年に印刷。その版本は米・国会図書館に二部現存している。当版は出版者名の部分を彫り直したのみなので、基本的には金陵本と同版といえる。したがってこれと⑧⑨の残本を含めるならば、金陵本の現存は九箇所に計一一組までが確認された。

各図書館の目録には、「万暦刊本」とのみ記録される『本草綱目』も少くない。今後、調査が進められるならば、それらの一部が金陵本と認められる可能性も考えられるであろう。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室）

小野蘭山・蕙畝と幕府医学館薬園

遠藤正治

小野蘭山（一七二九～一八一〇）の幕府医学館における業績として、五次にわたる諸国採薬、本草講義とこれにもとづく『本草綱目啓蒙』の出版などはよく知られているが、医学館付属薬園の経営や薬品会の鑑定などにかかわる重要な業績については何故かこれまであまり注目されていない。蘭山の事業は、その没後、孫蕙畝（一七七四～一八五二）に引き継がれて幕末に及ぶが、蕙畝の医学館における活動は、本草講義を行ったかどうかさえ疑問視されるなど、ほとんど解明されていない。

本報では、蘭山の公勤日記『蘭山先生日記』三巻（小野強氏所蔵蘭山自筆本・白井光太郎写本）、蕙畝の『御用留』（小野強氏所蔵蕙畝自筆本）および『蕙畝日記』二十五巻

（東洋文庫所蔵蕙畝自筆本）などを調査して明らかになった若干の新知見について報告する。

一　蘭山と医学館薬園

蘭山の『日記』から関連事項を摘記すると、

寛政十一年三月廿八日　江戸着
　　四月二日　医学館講書申渡さる
寛政十二年二月十六日　（医学館）薬園預植付等世話申渡さる
享和元年三月二十日　近国採薬（日光採薬）申渡さる
　　八月十四日　甲州採薬御用仰付らる
　　十二月二十三日　紀伊藩主より薬草吟味のため紀州へ遣さる旨申渡さる
享和三年二月廿日　安房上総下総常陸採薬仰付らる
　　十月八日　医学館薬草木植付場湯島聖堂後明地并四ツ谷伊賀町明地共植付栽培等世話仰渡さる
文化元年五月廿一日　駿州勢州志州辺採薬仰付らる
文化二年五月六日　上野妙義山等採薬申渡さる
文化七年正月廿七日　死去

医学館薬園は、明和二年に創設された躋寿館付設の薬園を引き継いだものであり、佐久間町の構内にあった。初期の医学館薬園には拝領植付薬草木七十二種をはじめ、日光門主下渡し品、郊外山野採集品、遠国取寄品、買付品などが栽培してあり、出席者に栽培品を少しずつ分与することが許されるなど教育用薬園として機能していたようである。しかし、田村西湖や太田澄元の没後は管理にあたる本草家が払底して荒廃が著しくなっていた。

このような事情から、蘭山は着任十カ月後、多紀氏より薬園預りを命ぜられている。その際、「追々他の御薬園より種類被取寄可申採薬之草追々可相植申候事」なる示達を受けた。ここに医学館薬園の再建と充実という任務が生じたわけであり、この任務とのかかわりで、いわゆる幕命による諸国採薬が実現したものとみられる。事実、採薬によって薬園の拡充がはかられ、構内薬園の他に四ツ谷伊賀町（現新宿区三栄町二七・二八）に一八九〇坪の付属薬園が開設されている。なお、蘭山の諸国採薬は五次ではなく六次に及んだことが『日記』から確かめられる。

構内薬園は、文化三年の大火で医学館が焼失した際罹災するが、医学館の移転にともない新橋通佐竹中屋敷に移設され、蘭山と蕙畝によって再建される。

二　蕙畝と医学館薬園

蕙畝のこれまで不明であった生年は、「天保六年六十二歳」とある記事から逆算して安永三年と推定できた。『御用留』と『蕙畝日記』から関連事項を挙げると、

文化七年四月廿一日　医学館講書并四谷伊賀町薬草木植付場所世話仰渡さる
文化九年七月廿八日　（医学館）調合役申渡さる
文化十年五月三日　寄合医師並仰付らる
文政三年十二月廿四日　小石川養生所出役、医学館講書等今迄通仰渡さる
文政九年六月廿一日　御番医師仰付らる
天保五年二月七日　自宅と丹羽五左衛門下屋敷内借地薬園（三百坪余）焼失
九月十三日　南本所猿江町薬草植附場拝借地願の通仰付らる
天保八年六月六日　医学館番町薬園見分

四ツ谷薬園は、医学館主多紀元簡死去直後の文化八年返地となり、同年五月、番町火除明地（現千代田区富士見二―一四）が代替地となるが、その際蕙畝の世話役は外れる。このため蕙畝は私設薬園の経営につとめ、のち天保八年にはこの番町薬園の開発にも関わる。番町薬園は安政年二月返地となり、栽培植物は構内薬園に移植されている。

（岐阜県立大垣工業高校定時制）